

様の相対運動知覚特性が存在するのかについて実験的な検討を行い、各々の種の生態などとも照らし合わせながら霊長類一般の運動視特性について実証的な研究を継続していく予定である。

3-2 ニホンザルの古分布復元情報としての民俗資料 (例：厩ザル) についての研究

三戸幸久 (NPO 法人ニホンザル・フィールドステーション)

対応者：川本芳

これまで復元したニホンザルの古分布にもとづき、現在調査中の民俗資料：厩ザルの由来地すなわち個体のかつての生活地をどの程度推定でき、古分布の復元に活用できるかを東北地方中心に調査をした。対象とする厩ザルの条件として、その個体が「薬用による所有」、「学校など公共施設内保管」として存在している場合は除外し、おもに「個人の厩に祀ってあったという確証を得た個体」にのみ限定した。

まず、地図上に復元した大正時代以前のニホンザルの古分布地とこれまで確認された厩ザル所在地をあわせてみると、その多くが重なるか隣接していることがわかる。これに現地において聞きとった厩ザル個体由来情報を付加すると、おもに山間部では、地元猟師が活動する場合は地産“地消”といえる状況にあった。

また、平野部における厩ザル個体の由来については山間部とは異なり、より遠くから持ち込まれた可能性が否定できない。しかし、こうした局地的凡恒久的様相をみせる民俗的習俗は、その地帯の自然環境と密接な関わりを持って成り立っているため、地産地消の様相は色濃いとおもわれる。こうした習俗が狩猟圧を引きあげニホンザル分布の縮小に関わりをもっていたことも推測できる。また、とくに藩政時代においては藩による火縄銃管理支配の厳格さと産物の移出入にたいする厳しい規制が布かれていたため、由来時期が明らかに江戸時代にさかのぼるものは、ニホンザルの頭蓋骨が藩外へ持ち出されたり、藩内へ持ち込まれた可能性は低く、藩内の隣接する生息地域から捕獲・由来したものと推定してよいとおもわれる。

これまで京都大学霊長類研究所の川本芳准教授によってすすめられてきた東北地域のニホンザルミトコンドリア DNA によるタイプ・系統調査の結果は、ほぼ斉一的な 2~3 タイプに収斂されており、本調査結果と矛盾しない。

以上の結果から、「東北地方」という条件付きながら厩ザル個体の多くが所在地地域および隣接地由来の

ものと判断してよく、ニホンザルの古分布の復元の重要な情報として位置づけることができた。

3-3 東西日本で比較したニホンザル各種パラメータの人為的な影響による変容

三谷雅純 (兵庫県立大・自然・環境研)

対応者：渡邊邦夫

現在の日本列島では、二次植生や田畑、住居などの人為的影響によってニホンザルの土地利用や生息密度、さらに繁殖行動に変化が表れる。本研究では、ニホンザルの生息する日本列島の環境を植生に応じて東西にわけ、それぞれを代表する地域の環境で人為的な活動の程度とニホンザルの土地利用、生息密度、繁殖行動などの各種パラメータを定量化し、比較を試みた。その際、インターネットで公表されている各種磁気情報や文献、行政記録などを参考にした。

平成 21 年度は、平成 20 年度に引き続き近畿・中国地方を重点的に分析した。既存のデータは ArcView GIS (ESRI) で整備したものであったが、現在は旧来のシステムから大きく変わった Arc GIS (ESRI) を積極的に利用するために、植生や人間の土地利用と人口、気象などの磁気情報を引き続いて整備した。今後はこの結果を公表に結びつけたい。

3-4 下顎犬歯形態の変異からみたマカク属の種間分化について

山田博之 (愛知学院大・歯・解剖)

対応者：濱田穰

現生 19 種もの多様性をもつマカク属でも下顎犬歯形態に何らかの違いがあることが予測される。歯の比較形態といえば大臼歯がよく研究されているが、犬歯に関する研究はほとんどない。それは犬歯の形態にはあまり変異性がないだろうとの予断によるものだ。2009 年度の共同利用研究によってマカク属の下顎犬歯形態はオスとメスで大きさにかなり違いがみられるが、形態には上顎ほど性差が無いことがわかった。また下顎犬歯では上顎よりも遠心点角 (distal shoulder) が明らかでないため、上顎のように歯冠近遠心径や頬舌径が計測できず、歯の大きさは歯冠の長径や短径の計測が当てられる。形態については近心辺縁隆線の走行、近心窩の有無、近心隆線の走行、舌側結節の発達程度などにより種間差があることが明らかになった。これら下顎犬歯の形態変異がマカク属の種分化に関係していることが示唆された。